

# ふくたーな

## 第39号

2010年1月発行

1. 主催共催行事報告(2~4頁)
2. センター活動記録(5頁)
3. センター往来(6~7頁)
4. 現地科学技術情報(8~11頁)
5. あとがき(11頁)

### 子ヤギ誕生

10月1日、当センターで子ヤギが誕生しました。

生後数日にしてもう元気に走り回っています。



### エスタが第1子出産

12月9日、職員のエスタが女の子を出産しました。  
名前はJaniceです。

左がJanice、  
右が7月に生まれた我が子の瑤雪(さゆき)です。



Mílíma haikutaní, lakíní bínadamu hukutana.  
山と山とは出会わないが、人は出会うものだ。(スワヒリ語のことわざ)



## 1. 主催共催行事報告

### 第161回学振ナイロビセミナー 「マラリア撲滅は可能か」

日時：平成21年11月10日午前11時～12時半  
場所：JSPSナイロビ研究連絡センター書庫  
講師：金子明氏(カロリンスカ研究所准教授)  
司会：駒澤大佐(JSPSナイロビ研究連絡センター長)  
共催：長崎大学ケニア拠点  
出席者：講師等含めて27名

南太平洋ヴァヌアトウ共和国アネイチウム島においてマラリア根絶を達成した研究者として高名な金子明カロリンスカ研究所准教授が、長崎大学ケニア拠点の招きで、第5回多国間マラリアイニシアティブ全アフリカマラリア学会に出席するためナイロビを訪問した機会を利用し、本セミナーが開催された。在留邦人のマラリアに対する関心が高いことから、セミナー参加者の対象は日本語が理解できる一般の方とし、講演内容は金子准教授の研究内容、最先端の知見を主としつつ、一般のマラリア対策も交えることとした。

日本人会への通知がセミナー開催わずか3日前であったにもかかわらず、当日の会場であるナイロビセンター書庫はほぼ満員となった。金子准教授の講演要旨は、ワクチンのような言わば「魔法」が無くても現在取り得る対策でマラリア根絶は可能である、しかし根絶のためには地域住民の協力が最重要、また根絶の維持には外来者の検疫が必要、ということであった。現在の世界的潮流は全世界均一のマラリア対策であるが、金子准教授が提唱する地域特性に応じたマラリア対策の概念も紹介された。アネイチウム島はマラリア根絶で有名になったお陰で観光客が増加するなど、社会的影響についても言及があった。

講演終了後に質疑応答の時間を持ったところ、特にケニア及び東アフリカでのマラリアの現状や対策、予防薬、治療薬、媒介蚊など、当地で生活する上での実際的な注意点に関心が集まった。金子准教授の専門外となる媒介蚊等に関する質問に対しては、当地の事情に詳しい長崎大学ケニア拠点の研究者も回答側に回り、在留邦人へのマラリアに関する正しい知識の普及に貢献した。セミナー終了後、昼食と共に意見交換会を持った。



講演する金子准教授



講演を聴く参加者



意見交換会の様子



## 第9回熱帯地域持続可能園芸農業学会における事業説明会

日時：12月3日(木)夕刻

主催：世界野菜センターアフリカ地域センター(タンザニア連合共和国アルーシャ)

演者：Willis Owino博士(ジョモケニヤッタ農業技術大学)

参加者：約50名

東アフリカJSPS同窓会員のWillis Owino博士が、12月2日から5日までタンザニア国アルーシャで開催の第9回熱帯地域持続可能園芸農業学会に出席するのを機に、同博士の提案で行われた事業説明会。当初4日に行う予定であったが急遽3日に変更された。JSPSブローシュアや発表スライドなどを持参したナイロビセンター事務補佐員のガブリエル・エカラレは、4日の発表を想定して3日にナイロビを出発したが、国境通過後の道中大雨洪水の影響でバスの到着が大幅に遅れ、学会運営当局から割り当てられた発表開始に遅刻。結果的にわずか5分の発表となった。

発表は短かったものの、参加者の関心は非常に高く、持参したブローシュア25部はすぐに配り終え、入手できなかった参加者の中には、購入しても良いので更に部数を希望すると言う方も居たとのことである。



遅刻の原因となった  
大雨による道路損壊の様子



学振ブローシュアを手に  
事業説明を行うオウイノ博士



会場のホテル

## JSPSアジア・アフリカ学術基盤形成事業 東アフリカ熱帯病セミナー 「顧みられない感染症の今」

日時 : 平成21年12月3日～5日  
場所 : ケニア中央医学研究所訓練センターホール 及び 長崎大学ケニアプロジェクト拠点  
司会 : 嶋田雅暁(長崎大学教授、駒澤大佐JSPSナイロビ研究連絡センター長)  
演者 : 二見恭子(長崎大学ケニア拠点)、John Lusingu (タンザニア中央医学研究所)  
Julu Boniphace (イファカラ保健医療研究所)、橋爪真弘(長崎大学熱帯医学研究所)  
井上信吾(ケニア中央医学研究所、JICA)、Matilu Mwau (ケニア中央医学研究所)  
N'gethe Muhoho (ケニヤッタ大学)、John Kiiru (ケニア中央医学研究所)  
参加者 : 発表者等含み42名  
使用言語 : 英語

平成19年度採用のアジア・アフリカ学術基盤形成事業「アフリカにおける『顧みられない病気』の学際的研究」に関連して行われたセミナーである。同課題のセミナーは初年度以来毎年、日本側拠点機関である長崎大学熱帯医学研究所と当センターの共催で行われてきた。初年度以来、本課題のセミナーでは「学際的研究」の重要性が特に強調されてきたが、最終年度に当たる今年も従来と同様に多分野から発表者を得ることができた。

具体的には、ケニア国内のマラリア媒介蚊分布、ケニアを中心とした気候変動と感染症の関連、エイズと孤児に重点を置いた疫学的研究、ウィルス性脳炎の状況、ケニアにおけるアルボウィルスの疫学、住血吸虫症媒介の制御、コレラ、マラリアワクチン開発の現状と、多様な疾患を多様な視点で捉えた研究成果が披露された。通常学会といえば同じ分野の専門家が集まり、非常に細かい点について議論の行われるのが一般的であるが、当セミナーは普段聞くことのできない専門外の最新知見を得る良い機会となり、まさに「学際的研究」を標榜する本課題の目指すところと一致するセミナーであったと言える。発表者には事前に、専門外の聴衆も居ることを前提として、分かりやすく発表することを依頼し、また質疑応答の時間を長く持つことで、今後の学際的研究の基盤作りに貢献できるよう配慮した。



セミナー目的を説明する嶋田教授



質疑応答の様子



セミナー終了の挨拶を行う駒澤

## 2. センター活動記録

### 10月

- |                |                                                                                                                                                                            |
|----------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 10月8日          | 日本大使館定例会合同会議に出席。帰途、JICAケニア事務所に立ち寄り、ケニア政府科学技術政策につき情報収集。                                                                                                                     |
| 10月14日         | カンガ研究者の織本知英子氏と共に、ナイロビ大学芸術意匠学部オニャンゴ学部長らを訪問。当方から織本氏の研究に対して協力依頼を行ったところ、図書館利用の便宜を図るなど全面的な協力の申し出あり。逆に先方からは学生指導やセミナー開催の依頼があった。                                                   |
| 10月18日<br>～20日 | 駒澤がケニア西部ニャンザ州スバ県へ調査研究旅行。                                                                                                                                                   |
| 10月21日         | 日本大使館定例会合同会議出席。                                                                                                                                                            |
| 10月23日         | 午後2時15分～3時45分、第9回JSPS東アフリカ同窓会役員会。<br>出席者：Shaukat Abdulrazak会長(国家科学技術評議会事務総長)<br>Francis Mathooko会計(ナイロビ大学南東校教授)<br>Hassan Were書記(マシンデムリロ科学技術大学)<br>駒澤大佐(JSPSナイロビ研究連絡センター長) |

### 11月

- |                  |                                                                                               |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 11月4日            | 日本大使館定例会合同会議に出席。                                                                              |
| 11月10日           | ケニア国立博物館霊長類研究所スレイマン主席研究員がセンターを訪問。アフリカ産霊長類モデルを用いた霊長類の慢性疾患に関する分子生物学的研究を、共同で行える日本人研究者の紹介依頼あり。    |
| 11月17日<br>～25日   | 駒澤一時帰国。調査研究旅行。                                                                                |
| 11月25日           | 同窓会書記のウェレ博士が、ナイロビ市内のホテルで開催されたJICAケニア帰国研修同窓会年次総会に出席。JSPSプログラム等につき講演を行う。                        |
| 11月28日<br>～12月2日 | 古川佑子ロンドンセンター長訪問。その関係で、29日ナイヴァシャにてヘイマン英国文化振興会地域主任と面談。30日、アフリカ開発新パートナーシップ(NEPAD)BecA所長クバタ博士を訪問。 |

### 12月

- |        |                                                            |
|--------|------------------------------------------------------------|
| 12月2日  | 日本大使公邸にて開催の天皇誕生日及び即位20周年祝賀会に出席。                            |
| 12月3日  | 日本大使館定例会合同会議に出席。                                           |
| 12月4日  | 国家科学技術評議会(NCST)忘年会に出席。                                     |
| 12月9日  | コリル博士の招待でケニヤッタ大学訪問。アルコール分解酵素の遺伝多形に関して共同研究できる日本人研究者の紹介依頼あり。 |
| 12月16日 | 日本大使館定例会合同会議に出席。                                           |

### 3. センター往来

今四半期のセンターへの来所者は延べ102名、うち日本人が94名であった。実人数は、合計63人、うち日本人が55名であった。また、2名の研究者に対しケニアの調査許可取得の支援を行った。

#### 来所者名簿（ABC順、五十音順）

| 名前                     | 所属                    | 役職等    |
|------------------------|-----------------------|--------|
| Edwin Oyaro Ondieki    | ナイロビ大学建築学部            | 講師     |
| Francis Mathooko       | ナイロビ大学南東校             | 教授     |
| Hassan Were            | マシンデムリロ科学技術大学         | 理学部長   |
| Kauti Matheaus Kioko   | ナイロビ大学                | 博士     |
| Mbaruk A. Suleiman     | ケニア国立博物館霊長類研究所        | 主席研究員  |
| Oliver Claus           | STRATEC Medical 社     | 社員     |
| Shaukat Ali Abdulrazak | NCST                  | 事務総長   |
| Simon Ayienga          | 西尾工作所ナイロビ支部           |        |
| 浅井英利                   | 名古屋大学                 | 研究員    |
| 浅沼修一                   | 名古屋大学                 | 教授     |
| 生貝寿夫                   | 丸紅ナイロビ支店              | 支店長    |
| 石井ありさ                  | 在ケニア日本大使館             |        |
| 石川裕理                   | DoDo World            |        |
| 一瀬休生                   | 長崎大学                  | 教授     |
| 井上真吾                   | 長崎大学熱帯医学研究所           | 助教     |
| 岩下華子                   | 長崎大学                  | 修士課程   |
| 宇波恵                    | 西尾工作所ナイロビ支部           |        |
| 遠藤善孝                   | DoDo World            | 社長     |
| 岡林大祐                   | 日清食品ケニアOishiiプロジェクト   | リーダー   |
| 織本知英子                  | ポレポレオフィス              |        |
| 金子明                    | カロリンスカ研究所             | 准教授    |
| 河上洋子                   | アフロスペース               |        |
| 菅野直美                   | 青年海外協力隊員              |        |
| 神戸俊平                   | アフリカと神戸俊平友の会          | 獣医師    |
| 菊地多津子                  | 在ケニア日本大使館             |        |
| 喜田清                    | NPO法人道普請人             |        |
| 喜多伸治                   | 丸紅ナイロビ支店              |        |
| 木村千亜樹                  | 金沢大学                  | 理学部生   |
| 木村亮                    | 京都大学                  | 教授     |
| 楠和樹                    | 京都大学                  | 博士前期課程 |
| 国松豊                    | 京都大学霊長類研究所            | 助教     |
| 坂寄広大                   | 東京大学                  | 修士課程   |
| 桜井桂子                   | 東京大学                  | 修士課程   |
| 櫻井武司                   | 一橋大学                  | 教授     |
| 佐藤としえ                  | Mpata Investment Ltd. |        |
| 沢村芳                    | 西尾工作所ナイロビ支部           |        |
| 嶋田寛子                   | 長崎大学                  |        |
| 嶋田雅暁                   | 長崎大学                  | 教授     |



来所者名簿（ABC順、五十音順）

| 名前    | 所属                    | 役職等       |
|-------|-----------------------|-----------|
| 清水大輔  | 日本モンキーセンター            | リサーチフェロー  |
| 積奈津子  | 一橋大学                  | 社会学部生     |
| 田中靖雄  | ナイロビ日本人学校             | 校長        |
| 内藤直樹  | 国立民族学博物館              | 機関研究員     |
| 名嶋律子  | JICAケニア事務所            | 健康管理員     |
| 成田千加  | JICA                  | シニアボランティア |
| 西尾美也  | 東京藝術大学                | 博士課程      |
| 西尾咲子  | 京都大学                  | 博士前期課程    |
| 西野達郎  | 鴻池組ケニア事務所             | 所長        |
| 橋爪真弘  | 長崎大学熱帯医学研究所           | 助教        |
| 橋本泰典  | 三菱商事ナイロビ駐在事務所         |           |
| 林達雄   | アフリカ日本協議会             | 代表(医師)    |
| 平野香奈子 | CanDo                 |           |
| 二見恭子  | 長崎大学                  | 助教        |
| 古川佑子  | JSPSロンドンセンター          | センター長     |
| 前川芳秀  | 長崎大学                  | 研究員       |
| 槇原大悟  | 名古屋大学                 | 准教授       |
| 松本葉   | NPO法人道普請人             |           |
| 三村晴夫  | 在ケニア日本大使館             | 参事官       |
| 宮城裕見子 | Malaika International |           |
| 八木知己  | 京都大学                  | 准教授       |
| 山根裕美  | 京都大学                  | 博士課程      |
| 吉川久美子 | 京都大学                  | 修士課程      |
| 和田昭裕  | 長崎大学熱帯医学研究所           | 講師        |
| 渡辺薫   | 在ケニア日本大使館             |           |



センターの番犬ジュニアと  
お預かりしている研究者の方々の車



センターの書庫



## 4. 現地科学技術情報



### ‘Economic Survey 2009, Kenya National Bureau of Statistics’ (提供：JICAケニア事務所)

2004年度から2008年度にかけての学生数の推移に関する記述あり。

国立と私立を合計した学生数は、2004年度は9万1,541人、2008年度は12万2,847人と大きな伸び。このうち、国立大学は2004年度が8万1,491人、2008年度が10万619人と漸増。一方の私立大学は、2004年度の1万50人から2008年度の2万2,198へと倍以上の伸び。

男女別にみると、2008年度の学生数で、国立大学は男子が6万2,753人、女子が3万7,896人と男子が優勢であるのに対し、私立大学は男子が1万790人、女子が1万1,408人と、男女ほぼ拮抗し、2004年度から一貫してわずかに女子の多い傾向が見られる。

### ‘University of Nairobi, STUDENT INFORMATION HANDBOOK 2009/10, The Fountain of Knowledge’ (ナイロビ大学新入生配布冊子)

ナイロビ大学には2本の源流がある。一つは植民地政府主導の王立東アフリカ技術専門学校構想、もう一方は在東アフリカインド人社会主導のマハトマ・ガンディ記念芸術科学商業専門学校構想である。1950年前後から両構想が具体化し、1952年4月に王立東アフリカ技術専門学校設置。その後、両構想を一本化することにガンディ記念協会が同意し、1954年4月王立東アフリカ技術専門学校に統合された。最初の学生を受け入れたのは1956年4月のことである。その後ロンドン大学学長の努力で、王立東アフリカ技術専門学校は、1961年6月をもってロンドン大学付属王立ナイロビ校に改編された。学士の学位がロンドン大学から授与される状態がしばらく続いたのち、1966年に東アフリカ大学として独自に学士号を授与できるようになった。1970年7月1日、東アフリカ大学は、それを構成していた各国に分割され、ここにナイロビ大学が誕生した。

その他、学長からの祝辞、各学部での教育内容、学生生活支援などの記述あり。

### アフリカ開発新パートナーシップ (NEPAD) 生物科学分野東部中部アフリカネットワーク (BecANet) 小冊子 (11月30日クバタ所長訪問時に入手)

NEPADの目的はアフリカの持続可能な発展を加速させ、貧困を撲滅し、アフリカを周縁化から復活させることであり、その手段として科学技術が重要視されている。2005年、NEPADは旗艦的事業の一つとしてアフリカ生物科学イニシアティブ (NEPAD/ABI) を創設。生物工学からアフリカ固有の知識に至る幅広い分野を結び付け、医療や農業、環境、鉱業の進歩に貢献することを目的としている。NEPAD/ABIの下には、アフリカを4つの地域に分けて各地域に研究拠点が置かれ、そのうち東部中部アフリカを対象としているのがBecANetである。

BecANetの主な事業は東部中部アフリカの人材育成で、修士課程及び博士課程の学生を支援している。拠点はナイロビの国際家畜研究所 (ILRI) にあり、対象国は、西はカメルーンやガボン、サントメプリンシペまで、北はスーダンまで、南はマダガスカルに及んでいる。

旗艦的プロジェクトの紹介。ウガンダの国立農業研究所 (NARO) に拠点とした、バナナ類の病害対策の研究。ウガンダはインドに次ぎ、世界第二位のバナナ類生産国。

(次ページへつづく)



**NYANI BULLETIN (第4巻第4号)、国立博物館附属霊長類研究所隔年報告書 (2006 - 2008年)  
(同研究所スレイマン博士より寄贈)**

ケニア国立博物館附属霊長類研究所は、1960年にルイス・リーキー博士により設立。ヒト以外の霊長類モデルを用いて、医学研究を行うことが主な役割である。主に熱帯感染症の研究が行われていたが、近年は非感染症の研究も行われている。

職員150人のうち、30人が修士以上の学位を持つ研究者である。

分野：熱帯感染症、マラリア、住血吸虫症、リーシュマニア、トリパノソーマ、ウィルス学、分子生物学、生殖学、自然保護・生態学、非感染症疾患、動物飼育施設。

**新聞記事より**

モンバサ市で開催された東アフリカ教職員組合校長会議においてケニア山大学学長が、現在に教育システムは試験で高得点を取る事に重点が置かれており、実際の世の中との結びつきが弱いと発言。研究費への歳出を増やせば教育システムも理論重視から実践重視へと変わっていき、新たな発見や発明につながるだろうとの考えを示す。現在のシステムでは成績が悪くて大学に入れない生徒の可能性を伸ばす効果もある。(Daily Nation紙、10月1日)

国立大学が民族別に住み分けられつつあることに警告を発する社説。社会の鑑たる大学として不適切であり、国の統合を脅かす傾向である。(Saturday Nation紙、10月3日)

内戦が続くソマリアで国外退避する国民が多い中、多くのソマリ人が本国に帰国し、医学を学んでいる。モガディシュにあるベナディル大学医学部には20人の帰国者が在籍。昨年は2人の学生が戦闘に巻き込まれて死亡したが、安い学費(年間1,800米ドル)と豊富な外傷症例が魅力。内戦のため多くの外傷患者が大学病院へ運ばれて来る。卒業資格はスーダン、スウェーデンなどで通用しWHOも公認。(Daily Nation紙、10月3日)

キアンバ高等教育事務次官が、ヴォイ県の沿岸技術専門学校で行った挨拶で、中堅専門学校の卒業生は公務員等を目指すべきではなく、学校で学んだ技術を用いて積極的に起業するべきと発言。青年省も若者の企業を支援する予算を配分した。技術専門学校で学んだ技術は、ケニアを工業国に変換する原動力となる。(Daily Nation紙、10月6日)

2週間前のイノオレロ大学の承認にあたり、高等教育委員会が、近年中堅の技術専門学校が学位発行を好む余り、大学に改組する例が目立っているが、専門学校の教育は大学への橋渡し役として重要であり、今後は中堅の教育を強化する必要があると、声明を出した。イノオレロ大学も、前身の専門学校時代の教育を継続する予定である。(Daily Nation紙、10月6日)

国立大学職員のストライキが中止。政府による19億シリングの拠出が確認されたため。(Daily Nation紙、10月12日)

大学が市街地に校舎を持つ例が増えている。国立、私立を問わない。モイ大学はナイロビ市街地に物件を購入した。ケニアメソジスト大学もナイロビ市内大学通りに購入。この傾向はナイロビ、モンバサ、キスム等ケニア国内主要都市で見られる。主な目的は市内中心部で勤務する人たちの取り込みを図ること。(Daily Nation紙、10月12日)

ケニア国立農業研究所の2014年までの5年計画につき、同研究所の全面広告あり。4ページに及ぶ。(Daily Nation紙、10月12日)

大学が市街地に校舎を持つ例が増えているため、市街地の物件が値上がり傾向。ニエリでは大きな経済効果をもたらしている。一方で大学の教員は、主要校舎以外にも授業を受け持つことになり、教育の質の低下が懸念される。(Daily Nation紙、10月13日)

(次ページへつづく)

## 新聞記事より

大学が資金内に陥って閉鎖される例が出ている。キリリ女子大学では2002年の開校以来まったくキャンパスの整備がなされておらず、学長が解任された。(The Standard紙、10月13日)

大学が遠隔地に校舎を持つ例が増えるのにつれ、教官の負担も増している。高等教育委員会では遠隔地の校舎でも常勤の教員を採用することを勧めている。ナイロビ大学は西部の校舎で常勤教員の採用を予定している。(Daily Nation紙、10月14日)

モイ大学とジョモケニヤッタ農業技術大学が、マラクウェット県のチェボロルワ農業技術研究センターの編入を巡り争っていた問題で、ルト農業相が両大学ともに編入を認めないとの声明を出した。それによると、もしこれが許可されると農業従事者が訓練を受ける機会を奪うことになりかねず、これは中堅技術専門学校の設立目的に反することである。(Daily Nation紙、10月15日)

南アフリカの自由州大学で、人種差別の罪で公判中の白人学生4人が、大学復帰を認められた。同大学100年以上の歴史で初の黒人学長の決定。しかし、与野党双方とも反対意見が強い。(Daily Nation紙、10月20日)

国家科学技術評議会による科研費公募の広告。一般向け及び修士、博士課程学生向け(Daily Nation紙、10月21日)

高等教育省、高等教育委員会、高等教育学資融資委員会によると、ケニア以外の東アフリカの大学に通う学生に対しても、近く融資を開始する。また、返済を容易にするため、携帯電話を用いた送金も利用可能になる予定。(Daily Nation紙、10月23日)

東アフリカ高等教育の特集記事7ページ。(The East African紙、10月26日)

高等教育委員会最高責任者のスタンダ教授が、ケニアの大学の研究環境及び教員の労働条件を改善しなければ、ケニアから外国へ研究者が逃げてしまう、と懸念を表明。(Daily Nation紙、10月27日)

ジョモケニヤッタ農業技術大学タイタタヴェタ校舎のボガ校長が、大学に別の水源を確保するため7千8百万シリングが必要と述べる。現在の水源は地域住民と共用しており、供給が不安定。(Daily Nation紙、10月29日)

高等教育科学技術省による広告。11月11、12日に開催の「アフリカとヨーロッパ間の科学技術協力に関する国際会議」。モンバサのホワイトサンズホテルにて。どの分野で協力を行うのが効果的か提言するのが会議の目的。(Daily Nation紙、11月9日)

高等技術専門学校の教育課程が学校自身で作成できるようになると、コスゲイ高等教育大臣。現在はケニア教育研究所が作成している。労働市場に柔軟に適應できる教育課程作成が目的の制度変更。課程の評価機関も設置予定。(Daily Nation紙、11月10日)

新たに設立されたボンド専門学校大学が経済的苦境にあり、教員雇用や施設整備を行えない状況になっている。(Sunday Nation紙、11月15日)

ジョモケニヤッタ農業技術大学の主催で、11月23日から一週間、世界農業高等教育及び農業研究協会による第6回会議が開かれる。気候変動による農業生産低下について議論が行われる予定。(Daily Nation紙、11月17日)

エジャトン大学が、マウ森林保全についての知識を広めるために、学術センターを設立する計画あり。マウ森林の破壊により、近年周囲河川の水量が減っていると言われている。(Daily Nation紙、11月17日)

高等教育科学技術省による2ページ全面広告。11月23日から26日まで開催の第4回アフリカ連合教育大臣会議について。(Daily Nation紙、11月23日)

ケニヤッタ国際会議センターで開かれている、世界農業高等教育及び農業研究協会会議において、農業高等教育の教官が実地の農業を経験していない例が多く、農業において実際に起こってくる問題に対応するよりも、国際雑誌に投稿できる論文の生産に重点が置かれているという批判が出た。参加している研究者からも賛同が得られた。(Daily Nation紙、11月25日)

(次ページへつづく)

## 新聞記事より

ケニヤッタ大学法学部開校の全面広告。11月27日に開校式あり。(Daily Nation紙、11月26日)

2008年のケニア中等教育統一試験を受けて来年から大学への入学を認められた3000人に対し、学部変更の最終受付期間を通知。合同入学審査委員会より。同試験により大学に合格した2万73人のうち大半は、既に入学済み。(Daily Nation紙、11月27日)

大学の拡大に歯止めをかけ、教育の質を守るべき。(Daily Nation紙社説、11月30日)

2人のケニア人学生がオーストラリア学生協会(AUSI)の奨学金を授与された。2百4十万シリング。学部教育の学費に使われる。(Daily Nation紙、12月8日)

ケニア中央医学研究所とウェルカムトラストとの研究グループが、キリフィで行った研究の結果、マラリア原虫がヒトの免疫機構から逃れる仕組みを解明したと発表。アルテシニン抵抗性のマラリアが増える中、新薬開発を期待。(Daily Nation紙、12月10日)

モイ大学が航空宇宙学部を開校するのに合わせ、航空機を取得した。患者の緊急輸送にも使われる予定。(Daily Nation紙、12月14日)

1999年から2009年の間に、大学が9校、国立大学の分校が9校開校した。始まりはモイ大学の分校だったものを独立させたマセノ大学の開学である。国立大学ではマシンデムリロ科学技術大学がこれに続いた。国立大学の学生数が一見増えているように見えるが、これは分校による効果が大きく、入学基準点が下がっているためとも言える。一方で経済的理由から退学する学生も少なくない。(Daily Nation紙、12月30日)

## 5. あとがき

第三四半期は子ヤギの誕生で明けました。雨不足でセンターの草も育ちが悪く、ヤギの成長が心配されていましたが、11月以降、予想されたエルニーニョの豪雨は無かったものの適度に雨が降り、センターの所在するナイロビのみならず、動物個体数が減っていた各国立公園も緑一色になったとのことでした。

例年第三四半期は訪問研究者が少ないようですが、今年も例に漏れず、お陰様で日本に一時帰国することができました。一方で、今四半期中にセミナーを2件、事業説明会を1件開催し、センターの対外的な活動を維持することができたのも、日頃からご支援いただいている方々のお蔭です。特に突然の無理なお願いにも関わらず、快く第161回セミナーの講師を務めていただいた金子明先生、またAAプラットフォームセミナーの開催に御尽力いただいた嶋田雅暁先生、どうもありがとうございました。アルーシャでの事業説明会は、他団体主催の学会を利用して行うという新しい試みで、JSPS東アフリカ同窓会の活動も徐々に活発化しているという印象を受けます。これを受けて、アフリカからの学振事業応募が更に増えてほしいところです。

職員のエスタが無事12月9日に女の子を出産しました。現在育児休暇中で人手が一人少なく、訪問者の皆様に十分なご支援ができない可能性もありますが、しばらくの間、御理解と御協力をお願い致します。

ふくたーな 第39号 (2010年1月発行)  
日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュースレター  
編集・発行者：駒澤大佐



日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター  
Japan Society for the Promotion of Science, Nairobi Research Station  
P.O. Box 14958-00800, Westlands, Nairobi, Kenya  
Tel : +254-(0) 20-4442424 Fax : +254-(0) 20-4442112  
Email : jsps1@africaonline.co.ke